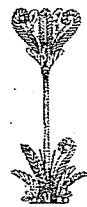


牧口教育思想と生活知

近代宗教運動論の視点から

島 蘭 進



生活知の重視

私は宗教学を勉強しておりますが、特に近代の日本の民衆宗教運動、いわゆる新宗教に関心がございます。前から創価学会という新宗教の創始者である牧口常三郎が大変重要な思想家、宗教家であると感じていました。しかし、牧口の名著とされる『人生地理学』も『創価教育学体系』も大部なものであります。いろいろ面白いところがあるのですが、何が牧口の思想の核心的なもので、何が私に響いてくるのかということが、もう一つつかめ

ないでいたわけであります。特に地理学の書である『人生地理学』と、教育学の書である『創価教育学体系』、私はどちらも専門ではありませんし、何が地理学と教育学の両方を貫いているのであろうか、ということが見えなかったわけです。

ところが、全集が発刊されたりいたしまして、牧口の著作に目を通しやすくなつてまいりました。私もボチボチとひととき始めたわけですが、その中で、『教授の統合中心としての郷土科研究』という著作を読みまして、ここだなと思いました。ここから、『人生地理学』

を振り返り、また、『創価教育学体系』への変容をみていくならば、牧口教育学、あるいは後の牧口宗教思想の中心となるものを理解できるのではないだろうか、と感じた次第です。

郷土科という科目、今の生活科のアイディアの元に作ったものと聞いております。ドイツあたりではかつて実際に行われていたようでありましたが、日本では牧口らの提案にもかかわらず、かつては行われませんでした。牧口には先見の明があつたわけですが、しかも牧口はこれを全教科の基礎になるもの、として計画した。個々のバラバラの教科でなくて、全教科の基礎となるもの、子供ら的人格形成の最も基盤に置かれるべきものとして考えたわけであります。それは、生活環境の中で、子供たちが生活している身の回りの事物、関係、社会の中でのものを考えていく、観察し、人々と接し、自らの力で考えていく。そういうことを目指す学科として、郷土科を考えました。つまり、ここで目指されているものは、生活に根ざした知識であり、また、生活に応用できる知識であります。したがって、皆が関心をもつことができ、身近で

あるから面白い。そして、喜びを伴った学習ができる、そういうはずのものと考えた。そういう領域ですので、大多数の子供たちが自発性をもって参加できる。そして、その教科においては先生があれこれと口出すものではなくて、子供が自発的に学び、自立する力と意志を育てていくのを先生が手助けする。そういう形での教え方が必要である。そういう自発的なしることも楽しい学習であるからこそ、身についた知識になる。そういうことができなければ、多くの知識が上からの教え込み、知識の注入になつてしまうであらう、そういうふうに説きました。

そこから振り返ってみますと、実は、『人生地理学』の『人生』という言葉も、人間の生活と結びつけて地理環境について考える、そういう学科として地理学を考えました。『人生』地理学という牧口独特の言葉をつくられたのもそういう考え方によるものです。また、創価教育、価値創造の生活の子供たちに学びとらせていく、という『創価教育学体系』の主張も同じ考え方に基づいたもので、生徒達の自発性に基づいて、生活の中での知識を生徒自身が育てていく。それを先生が助けていくと、そう

いう思想が根本にあることが分かります。

それを一口で言う、「生活知を重んじる教育」、あるいは「生活知を開発していく教育」と理解できると思います。その場合に、近代以降、我々が生きている時代で、生活知というものが、どういう位置に置かれているか、そういうことを考える必要があるであろうと思います。

そして、生活知が何故、教育で生かされないのか、何故、学問的知識や教育が生活知から遊離してしまうのか、というより、学問はもともと生活から遊離する、そういう可能性を本来持っているのではなからうか、そういうふうに考えるのであります。

私が郷土科の考え方に非常に引かれるものを感じた理由は、私自身が宗教学という学問をやっておりまして常に考えてきたことは、生きている宗教から離れない宗教学というのが可能であらうかということでありました。宗教についていろいろな学説がある、理論がある。しかし、それが生きている宗教生活から離れたものになってしまつては、本当の学問とはいえないのではないだろうか。というよりも、私自身にとって、本当の意味で響い

抽象化する。また、現実の知識を確かなものにするために、専門的に細かい知識を蓄積しようとする。そういうことが行われるからであります、そういうことが行われるたびに、現場から遊離するという危険がまつていると思われまふ。

したがって、これは小学校の段階から大学の段階まで、常に、学問的に厳密に考えたり、抽象化して考えたりする。あるいは細かい知識をしつかりとまとめていくというところ、生活に根ざした生活感覚から遊離しない思考をしていくことを、どう結び付けていくかが大変難しい問題だと思ふわけです。それに対して牧口常三郎という人は始めから、教育実践と地理学から教育学に到る牧口学の全体の課題として正面から取り組んだ。そういう思想家として近代日本では際立っていると思うわけです。学問思想家としても大変重要な意義のある仕事をなされたと思います。

近代においては、ある意味では生活に根ざした知識を育てる可能性が出てきた、とも言えると思います。というのは伝統的な社会では多くの人が学問から切り離され

てくるものがない、そういうふう感じていたわけあります。ですから、私の考えている宗教学のやり方は、本で勉強する必要もありますが、できるだけ、現場へ出かけていく。それを私は、現場主義と言っております。そして、自分とは違う立場、環境におられる方々と接する。対話的な場面ができてくるのですが、そういうところで、教えていただく、対話するというやり方をしてみたい。そういうやり方を、学問の世界では調査といったりするのですが、いかにも一方的で感じが合わない。また、フィールドワークと言ったりしますが、それにもなにかバタ臭い。ですから、現場主義といった言葉が適当だと思つていました。実は郷土科というのは、現場主義の教育というふうに言える。生活知を重んじるということは現場感覚を重んじると言えるのではないかと思います。

生活知に対して学問が生活から遊離してしまう傾向があるが、どうしてかというところ、学問は厳密さ、正確さ、あるいは普遍性を重んじるために、体系的なものを確立する、できるだけ多くのものを一度にとらえようとして

ていた。学問とは典型的に言うところ、お経、漢文の世界です。莫大な量のお経を理解するために、大変な知識が必要となる。しかし、それはさしあたり生活に必要な知識とはまったく違う知識です。ごく少数の人しか学べない。ほとんど外国語と云つていい漢文を勉強する。それによつて、大変重要な知識が得られるわけです。宗教的な真理の根本的なものがお経の中にあるのは確かですが、しかし、それが同時に権威を作るための学問という側面をもっている。經典を学んで自由に語れるということ、指導する無条件の権利を与えられる。ですから、伝統的な学問はそういう面で権威主義的なものをはらみやすかつたと思います。

一方、伝統的な生活知というのは、それぞれの地域の環境の中で民俗的な知識として育てられたわけですが、それは、とかく閉ざされた狭い生活環境の中だけであつてはまる知識であつた。また、非個人的なものでもあつた。個人が自分の力で学びとつていくというよりも、共同体で伝承されていくものであつて、個人の創意、工夫というものにはあまり縁がなかつたと思います。

近代化と生活知

そういう中で、近代化は大きな変化をもたらしました。近代教育は、伝統的な学問とは違う、知識の伝達のあり方を育てようとした。近代国家の担い手である一般大衆、あらゆる人々にとって大事な知識を育てる。それが近代教育の理想でありました。単に、読み書き算術だけでなく、広く社会や自然についての知識を与える、それが近代国家を支える市民にとって必要だという理念が近代教育の根本にあったと思います。当然、学問もそうした教育と結び付いて生活と密着したものにならなければならぬ。そういう理想をもっていた。個々人が民主的な社会を支える自立した人間である。そのための個々人の自発性を育成する。そういう知識のあり方でなければならぬ、という理想をもつて近代の教育、学問は出発したと思います。

ところが実際に近代化が進んでいきますと、必ずしもそうはいかなかった。むしろ、近代の学問がかえってまた、生活知から遊離していくことが生じたのではないだ

お婆さんから、あるいは近所の人たちから日常的な知識と結び付いたところで、生活環境の中で伝えられてきた知識としての、お産の知識がなくなつて、かわりに、厚い本を買つてきて勉強しなければならぬ。お産、子育て、しつけ、すべてそのようになってきています。そしてそれは大学の先生がテレビで話したり、あるいは難しい書物を書いたり、そういうところから勉強しなければならぬ、そういうことになってきました。できるだけ先生達も分かりやすい言葉で書こうとするわけですが、しかし、受け取る側にとりやばり、自分達の生活環境とは少し離れている、どこかに抽象化が働いている。なかなか我がものとはならない。身につかない知識になる傾向があると思います。

現代の若者の傾向というのは世界情勢については大変よく知っている。ニュースはよく見ている。しかし、自分と友達の関係、あるいは夫婦同士の関係についてはどうしたらよいのかわからないことがたくさんあり、途方にくれてしまうという傾向があります。

抽象的な知識によってふくらんだ頭と、しかし、体に

ろうか。我々が生活知の大切さということを訴えなければならぬ、生活感覚に密着した知識が必要なんだということを言わなくてはいけない理由は、伝統的な知識が生活から遊離していったという面と、近代のあるいは現代の我々が接している知識というものがまた生活から遊離している、そういう二面があるのではないかと思います。というのは、近代の学問はますます専門化し、抽象化していく。そして一般人から、手の届かないところへ遠く遠く離れていく。先端的な知識ほど、そういうところへ進んでいくという、そういう性格をもっていると思います。知識がますます複雑化し、生活の実感と結び付けるのが困難になってきます。たとえば、典型的なのが、人間の体に関するものでありまして、現代の医療が我々にとって大変に問題であるのは、医療的な知識が我々に最も身近な自分の体に関するものであるにもかかわらず、我々の知識から離れたものになってしまっている。たとえば今、お産をするときに、女性はそのお産の知識を産婦人科の先生が書いた書物から、学ばなければならぬ。自分が生活を共にして育ててもらったお母さん、

結び付いた知識という面ではいささか貧しい人間が、現代人の特徴ではないでしょうか。これは、近代化が育ててしまった知識が、生活知から離れていくということの現れかと思います。受験戦争というのもある意味ではそういうことと深い関係がある。そういう現代社会をおし進めていく最先端の知識に追いつくような人間を育てよう。あらゆる産業の場面で役立つ人間。そのために難しい数学や化学の知識を教える、その目標にそつて小学校からのカリキュラムが成り立ってくる。あるいはそれに足りないものは塾へ行つて学ばなければならぬ。生活知に根ざした教育をしようと思つてもどうしても、そういう生活知から遊離した学問のための受験勉強へと向かわざるを得ない、そういうことがあると思います。

つまり、近代教育の発展とは、生活知を育てていく自発的な知識形成というものを子供に促していく、そういうことを目標としながらそれが実現できなくなつてしまっている過程だったと思うわけです。

牧口常三郎の業績を考えていくには、明治から大正にかけてにそういう変換が起こったという時代背景

をおさえておく必要があります。伝統的な学問から自由になって、近代的な学問の理想が実現できるのではないだろうか、という希望に燃えていた。そういう時代から、次第に受動的な競争社会ができてきて、その中で教育になっていく。再び教育が生活から遊離していく、そういう方向へ発展していく時代の中で、牧口が仕事をしたと考える必要があります。

そういう時代の大きな流れがあっても、牧口は決して、自分の生活知重視の思想から離れることはありませんでした。従来、牧口の思想は、アメリカから入り大正時代に広まったプラグマティズムの影響が強いといわれておりましたが、私はプラグマティズムの思想の影響というよりも明治初期の教育思想の影響、それは、ヨーロッパで育てられた近代教育思想によるものですが、その影響を重く見た方がいいと思います。牧口が北海道時代に、最も若くて柔軟な時代に吸収した、そうした教育思想が根っこになっているようなのです。ペスタロッチとかスパンサーといった人々の教育思想だと思えますが、それが根っこになっている。そこにもう、生活知重視の思想

があったと思います。生活知重視の思想というのは決して牧口の独創ではなくて、近代の教育思想の中に太い流れとしてあるものなのです。

ですから、牧口だけではなくて、他にも似たような理想をもって様々な試みを行った教育家が近代にはたくさん出現しました。しかし、その中で、とりわけ牧口が目立っているのは、先程申しました、現場からの発想という点において、たぶん、最も徹底した考え方をもっていたかたではないかと思えます。つまり、生活知を重んじるということとは、現場の中で考えていくから自分の身についた知識になる、そういう知識を重んじるということですが、牧口は常に現場にいた。したがって、その立場から離れようが無かった、そういう生き方をした方だということなのです。

一時、教育現場を離れていたこともありますが、生涯の大方を、小学校を中心とする教育現場に身を置いた。公立小学校というのは現場感覚という点において、知識とか学問とか教育ということを現場の感覚でとらえるために、最もふさわしい場ではなかったかと思えます。た

とえば、医療の現場、大学教育の現場では、権威がものをいうところがあります。たとえば大学のゼミでいうと、外国語の知識を知っていれば、学生に文句を言われないというようなところがあるわけですが、小学校の現場というのは権威を傘に自分を守ることがしにくいところではないでしょうか。それと同時に社会全体を見た場合、社会の階層的な秩序からいって、一番現場的なものに近い。一番庶民的な世界だといえる。社会生活の一番基礎的な場面といましようか、そういうものを普段から身近に感じている。そういうところが公立小学校という所ではなかったかと思えます。

大衆自立思想

しかも、牧口の場合は、若いときに自分の生地から旅立ちまして、自分自身の力で身を立てた。立身という言葉が誠に身近に感じられた時代、そして、国の独立と個人の独立ということが大変に重要だということを多くの国民が感じていた時代に、しかも、自らの努力ですぐれた知識形成をした、そういう経歴をたどった。ですから、

自らの努力で自発的に学ぶということが、いかに尊いことであるか、いかに素晴らしいことであるかということ

を体全体で知っていたということがあると思えます。

現場からの発想、しかも特に自立ということが、現場において非常に大切であると感じていた、そういうところからの発想が牧口の思想、近代の生活知を重んじる思想の中でも、特に現場主義、そして自立するための知識、自立しながらの知識形成ということを強く打ち出された思想が出てきた背景だと思えます。

そこで、牧口の生活知重視思想というものの特徴として、大衆自立思想と結び付いているということがあげられます。これが、今でも特に大きな魅力をもっている部分だと思えます。当然、上から与えられる知識を否定することから、権威主義の否定が起ります。自分で学び身につけることが重んじられております。

『教授の統合中心としての郷土科研究』の中の面白い例は、西南戦争の英雄である谷村計介という人についての話です。この人は、修身科の教科書で賊軍に閉じ込められた官軍を救った使者として、英雄的な人物として取り

上げられているわけですが、それに対して大変に辛口の批評をしています。そういうふうな人物を模範的な人間だといえども、それが子供達に分かるであろうか。その場合に責任を果たすとはどういうことか、皆のため役に立つとはどういうことか。そういうことを体で覚えることのほうが大切ではなからうか。したがって、戦争について歴史的知識を教えるよりも、戦争の中での英雄的行為について言葉で教えて頭で覚えさせるよりも、まず戦争ごっこでもやらせたらどうか。こういうふうに言っているわけです。絶対的な忠誠が必要であるかどうかということ、子供が自分で判断しなければならぬ。その場合にまず自分たちの身の回りで、ゲームをやってみたほうが役に立つのではないか。そういう批判をしております。大変、今でも魅力がある考え方、大衆自身による学習行動、そして、身の回りの環境の変革、そういうことが目指されていると思います。

私が注目したい点は、これが、実は大乘仏教の思想と深い結び付きがあるということです。つまり大乘仏教というのは、もともと大衆のための仏教、あるいは、大衆

による仏教という性格を持っていたということです。これは仏教の中の大衆主義といつてよいと思います。一般に、宗教的な真理というのは大変深いものであるから、すべての人が分かるはずはない。したがって、少数の選ばれた人だけが、最も深い真理を獲得できるんだという、ある意味では、当然のエリート主義がある。一方で、最も大事な宗教的真理というのは、あらゆる人がつかむことができる。すべての人が同じ高さにはいかないとしても、人生にとつての最初の重要なポイントというのは、すべての人が平等につかまえることができる。だから、すべての人が平等に参加していく必要がある。そういう考え方があつた。こういう、エリート主義に対抗して大衆主義を打ち出しているという傾向がいつも出てくる。

仏教の中では、原始仏教というのは、どちらかというと、エリート主義に向かう傾向があり、それに対して大乘仏教とは大衆主義、菩薩思想であります。つまり、あらゆる人のための仏教、本当の真理から疎外される人、除外される人があつてはならない、そういう仏教が大衆仏教だと思ひます。その中でも特に法華経の中には大衆

自立の思想が色濃くあると思ひます。地涌の菩薩というものが出てまいりますが、それは大地に根ざした、生活現場を表す大地と同じ世界で生きている仏教、そういうところで仏教を守っていく地涌の菩薩というイメージです。大乘仏教の中で特に法華経の思想が、なぜ、近代の日本でこれほど大きな力を持ったかという点、一つには地涌の菩薩というイメージに代表されるような大衆主義が近代にふさわしい思想であるからだと言へると思ひます。つまり、少数の人が社会を指導していけばいいという時代ではなく、すべての民衆が自立して、社会に対する責任を負っていく、これが民主主義の理念であると思ひますが、それが宗教でいうと大衆主義の思想と重なり合う点が多いからだという理由です。

日本で近代、法華経、あるいは日蓮系の宗教というものが広まった一九二〇年代から七〇年代は、最も激しい変革と経済成長の時期ですが、それはまた近代日本における新しい大衆主義、あるいは大衆自立の思想の時代といふふうにも言えます。昭和時代というのは実は法華経の時代であつたと言えるかもしれない。宗教的に言うところ

それほど法華系の新宗教あるいは日蓮系の新宗教が巨大な力を持った。ですから、教育者であつた牧口が日蓮正宗に関わり合つたというのは、ある意味で必然性を持っている。つまり、最も大衆の生活に密着した教育を実現しようという志を持った方が、日本の宗教伝統の中で、最も大衆主義的な思想の傾向の強い流れの一つである日蓮正宗に共鳴されたというのは、ある意味で自然だつたと思ひます。

そういうわけで、牧口常三郎の思想と実践は、生活知重視思想、特に大衆の自立を重んじるという点に特徴がある。それは牧口が少年期を迎えた明治初年の日本の思想界の傾向でもあるし、同時に創価教育学会が出来てくる、大正、昭和初期の時代の傾向でもあつたと考えられます。

今、牧口が日蓮正宗に共鳴したのは自然だつたと申しましたが、しかし、なぜ、教育運動から宗教運動へ転身されたか。なぜ創価教育学会が宗教運動に向かつていったか。あるいは牧口個人にしてみると、なぜ、教育思想家、それも近代の啓蒙主義に近い立場にいた教育思想家が、宗教思想家・宗教運動家として活躍するようになった

たかは、大衆主義としての共通点ということだけからの説明では足りないのではないかと思います。そこで、『創価教育学体系』をどういうふうに読むかという、私なりの宗教学的な読み方ですが、有用性ということと関わりがあるのではないかと見当をつけているわけであります。

従来、牧口の宗教との出会いは、三谷素啓という日蓮正宗の先達と会われたこと、あるいは、その前後にお子さんを亡くされたということ、あるいは教育界における不如意等々いろいろな理由があげられておりました。それぞれに重要な理由であると思いますが、もう一つ重要な理由は、時代の転換、大正デモクラシーと呼ばれた時代が終息に向かつて、民主主義に期待をかけることが困難になる時代であったということがあります。そして、さらにもう一つ重要な点として牧口の思想の内在的發展というか、従来の牧口思想が、まだ解決し得ない問題を解決しようとする過程で、必然的に宗教と出会われたという面があるのではないかと考えるのです。

明治の一〇年代二〇年代というのは、日本は最も近代

の明るい希望を持っていた。特に自由民権運動が挫折する前は、あちこちで国民が勝手に理想を唱えることができた、下からのエネルギーがボンボン出てきた時代です。そういう時代に育ち、自分の力で自己形成をされた牧口ですから、教育に取り組みまれても、これから日本の公教育ができていくときに、大きな期待を持ちながら公教育の実践に取り組んだわけです。しかし、大正時代になると、大体近代日本の公教育というものが固まってくる。そして、学歴主義ができてくる。そういう時代に牧口の学校教育者としての時代は、終わりを迎える、そういう過程を思い浮かべていただきたいと思います。

始めに持っていた公教育への期待が、ある意味では挫折した。たとえば郷土科というのを唱えられた、しかしそれは実現しなかった。地理教育の理想を唱えた、しかし、現場の地理教育はまったく違うものになってしまった。そういう中で、退職の時点を迎えた、そういうことがあると思います。ですから、『創価教育学体系』では、近代の日本の教育体制の全体に対する批判をしているわけですが、『創価教育学体系』の提案が、実現す

る見通しは大変薄かった。時代の中では小さな声であるということ、もちろん承知の上でそういう本を出したと思うわけです。そうしてみると、教育運動では足りなかった、教育運動に代わってもう一つ強いインパクトを持つ運動にひかれる理由が十分にあったと思います。ですから、創価教育学会とは、教育運動でもあると同時に、宗教運動でもあった。運動としてみるとそういえませんし、思想として見ると教育思想だけでは何か足りないものがあつた。やはり宗教的なもので踏み込まなければならぬというような必然性があつたのではないかと、考えるわけです。

有用性を超えて

なぜならば、生活知を重んじるということは、どういう生活知が大事なのか、よい生活知とは何なのか、よい人生とは何なのか、という問いに当然ぶつかるからであります。牧口は初めから、幸福な生活を問題にしていますが、正面から取り組む、徹底的な解決を与える、そういう必要を次第に感じるようになったのではないかと

思います。生活に密着した知識とは何だろうか。さしあたり、生活に役立つ知識というふうに思われた。生活に役立つということ、大体のことは解決できそうだと考えられたと思います。『人生地理学』においても、郷土科研究についての書物でも、子供に対する質問として、これはどう役立ちますか、という問いを重視しています。つまり、有用性であります。『創価教育学体系』の言葉で言うと「利」であります。始めから「利」の観点から知識を形成することが大事なんだと、牧口は考えていたと思います。

しかし、『創価教育学体系』で正面から取り組んだのは、その先ではなかったか。つまり有用性を超えた価値規準とは何か、「利」を超える基準とは何であろうか、という問題ではなかったかと考えるわけです。これが価値論であります。価値論のユニークさは従来「真、善、美」の「真」に代わって「利」という価値を入れた点、「美、利、善」という価値の規準を立てられたところにありとされてまいりました。したがって「真」に対して「利」を重んじるということが、『創価教育学体系』の

しかし、牧口思想の展開からいうと、もう一つ違った視点があると思うわけです。つまり、「利」という点では『人生地理学』もそうであるし、『郷土科研究』もそうであると思うんですね。それに対して、『創価教育学体系』の価値論の特徴は、「利」とは「善」よりも低い価値であると設定している。「美」よりも「利」の方が上だ。しかし、何より「善」こそ大事だとなっていると思います。ですから価値の序列がはっきりしている。「善」を目指す教育でなければならない。「利」では足りないということがあると思います。

「利」というのは個人的な価値でありますが、「善」というのは社会的な価値であります。ですから道徳性の面において、一段高いもの、自分だけでなく、他者も考慮した価値判断ができる。さらに、「善」の中にも「小善」もあれば「大善」もある。それもまた見分けることができなければならない。価値を創造していくためには、これらを見極めなければならない。これは『創価教育学体系』以後、ますます強調されていることだと思います。

思索が進んでいく。これが昭和期の牧口思想の展開です。いずれも「有用性を超えて」という標語でまとめることができるものではないかと思ひます。

したがって、ここでは有用性を超えた価値として少なくとも二つの指針がある。一つは、社会的価値を重んじるべきであるということです。『創価教育学体系』の中には、はっきり書いてある。昭和の初期の国民生活の中心に社会倫理が頽廢しているか。責任感のない子供たちが育つ傾向にあるか、ということに対して、牧口は様々な体験を土台にして述べている。社会的な責任観という点から価値論を展開している。

これは、現在の創価学会における積極的な社会参加の姿勢ともちろん深い関係があります。牧口の時代が、現代の七〇年代以降の創価学会に直接つながっています。宗教は個人の救いを大事にすべきだと考えれば、そんな社会参加しなくていいわけですが、創価学会は、日本の宗教の中でも最も社会参加に熱心な教団で、それは牧口思想の中に原点があると言っているのではないかと思っています。ところが、創価教育学会が昭和一〇年頃から成

實際には「大善」生活というのは、日蓮正宗の信仰、宗教的な生き方ということになります。ですから、客観的な学問の立場から見ると、牧口は宗教に入ってしまったわけ、学問から飛び越えてしまったと判断できる。日蓮正宗の信仰をもたない人から見ると、ここはもう我々の領分ではないと、別のところに行ってしまった、と言えるかもしれない。しかし、我々は改めて考え直して見る必要があると思います。

価値創造ということは、「利」について重んじるという従来の生活知、有用性を重んじるということを越えて、さらに「善」の価値へと進んでいく生活を促しています。それは、社会倫理的な側面を持つている。牧口が大正時代にデュルケーム等の社会学思想から学んだことでありますし、さらに、宗教ともかかわってくる。社会倫理と宗教は深い関係があるところです。一方で、社会学的な方面から、社会倫理性、道徳性の必要というを感じられるようになり強調するようになる。他方で、日蓮正宗との接触から最高価値としての「大善」生活ということの唱えられるようになった。その両者がからみ合つて

長していく過程では、必ずしも社会参加という方向へ向かわないで日蓮正宗の方向へますます純化していく。個人の救いという方向へ純化していく。ここでは日蓮正宗が絶対的な価値であつて、他の宗教は間違つたものであるし、そういうものに従つてゐる人は間違つた人生を送つてゐる。そういうような方向もあつた。これはある意味では、近代的な宗教の多元性とか信教の自由というものには、部分的に矛盾する面がある。他宗教の価値を認めないということになると、自分の宗教の自由は認めけど、他の宗教の自由は認められないということになつて、近代的な民主主義と齟齬をきたす可能性があるわけですが、そういう方向もこの時代に出てきた。

それが、昭和期の創価教育学会の展開であり、牧口思想の展開であつたと思います。この二つの面を今後どのように創価学会の中で展開していくのであらうかが私などには興味のあるところであります。有用性を超えて、牧口が展開しようとした昭和期の思想には大きな可能性があると同時に、ある意味でまだ解決されていない問題もある。つまり、有用性を超えた価値をどのようにして

